

日本医師会優功賞を記念して

津久江 一郎 (S.36)

たまたま前号に学会開催「第30回日本アルコール関連問題学会」のご報告をさせていただいたところですが、今回は日本医師会の受賞報告です。

この賞そのものは、単に日本医師会の常任理事（1期のみ）及び社会保険診療報酬検討委員会の委員として長く任じていたというだけのことに対する評価であって、大した成果は疑問であります。

ただ、日医のこの委員会の永遠のテーマは現行の診療報酬で「物と技術の分離とその評価」をするというものであって、つまり診療報酬を Doctor fee と Hospital fee とに分けて評価しようではないかという至極真っ当な主張ではありました。

しかし、これは今精神科においても専門医とか認定医とか色々な動きが始まっていますが、この専門医を診療報酬上評価するということにもつながっていくことにもなるのです。

若い先生方はそれぞれの学会に出席されて、せっせとポイントを稼いでおられます。これで良いかというと、まだまだこれにはもう一つ大きな課題が控えています。

つまり、各科とも各学会等々がバラバラに行っているので、全体として見ると信頼性がないと外の人たちは思っておられ、これもまた尤もなことだと思っております。全科を通して標準化した医師としての評価を一本に纏める必要もあるわけです。

また、日医の基本姿勢として「医者の上に医者をつくらず」ということがあります。

いきなり話が横道に逸れましたが、本題について述べますと、実は日医ではこの賞よりもう一つ別物の「日本医師会最高優功賞」というのがあり、これもまたどうしたわけか20年以上も前（昭和59年）に頂戴しております。副賞としてもっと勉強しろということか、50万円も頂いたのを思い出しました。

この経緯については、広島県医師会速報 第1166号（1984（昭和59）年11月）“受け稽古”と題して挨拶文を寄せていますが、内容は小生が学生時代に大して勉強もせずに柔道に血道を上げておりましたが（大学に入ってからの草柔道の域を出ませんでした）、この時の経験で強くなったら黒帯になるのではなくて、初段になると後輩たちの受け稽古をするようになり、本当はそれから強くなってくることを知りました。

まさに私の受賞と受け稽古とは、時間的空間における密なる相関にあると、謙虚に自戒しているとその時に書いております。

また、年に一度の秋の広島医学会総会において、それより前（昭和57年）にどうしたわけか“楨殿賞”を受賞したことがあります。多分にこれが副線となっての受賞ではなかったかと自分では思っております。

それは兎も角、話を少し変えますが、私の師匠である初代の小沼十寸穂名誉教授が私淑しておられた、同じく広大名誉教授の西丸和

義先生（わが国の現代生理学の先達であり、確かに教授室に入ると正面に西丸先生のお写真が掲げられていた）は、呉の出身で呉一中の4回生でした。小生はその後身である呉三津田高校の4回生ですが、同じ4回生でもえらい差があります。

私が受賞した直後に偶然ではありますが、かなりこじつけ、無理がある説明に聞こえるでしょうが、実際に小生の高校生時代、生物同好会なるものを主催して、数名で再三に亘り天応の先生のご自宅内にある脈管学研究所に泊まり込み、研究と称してポーチを出してクラゲを探集したり、夜を徹して遊んでいたのは事実です。こうした縁のある西丸先生が呉の名誉市民に推挙され、その祝賀会があり、これに出席させていただきました。

この会では当然呉市長を始めとして、各界の名士が素晴らしいスピーチをされました。

その中でも白眉は西丸先生ご自身の挨拶であったように思います。

近代脈管学の創始者であり、何事も自らの手で開かれ、集大成された先生においてすら「人生で大切なのは先輩の引き、同僚との融和、そして後輩から押されることが成功につながる」と述懐されたのには深い感銘を覚えたものです。

私のような単に偶発的に宝くじが当たったようなラッキーさとは少々異なる、本物の人物の言葉に触れることが出来たという思いでいっぱいになりました。

同門の諸兄弟の会報とて、敢えて附記してみます。御諒恕下さい。

不備

(つくえせいいちろう：瀬野川病院)

